

2E-95

特16

416

音福の難患



とさ爪も

するとさ牙も

いかにせん

われなき人の

珠の

こゝろは

著者題

264

940

目 序

往昔奴隷たりしニ希臘人はかく曰へりき

暴君は我元を刎ね得べし、されど我精神の自由を奪ふ能はざるなり

此、語何を雄偉なる。壯烈なる。

かくこの信念を、この氣概を、この自由を、この偉力を、この至誠を、臣として有す

る君、子として有する父はいかに幸ならずや。嘗ては萬丈の光燄として、精神界の天

を燭し、忠孝道德の、形式ばかりが徒らに強ひらるゝの今日、強うる者に熱血なく、

強ひらるゝ者に熱涙なきの状態を目撃し、余は寧ろ逆境患難に泣ける、名もなき同胞

の上にもやがて來らんとする道德革新の爆源たらんづる望を屬せざるを得ざるなり。

患難の福音

高田集藏著

一人中の人

人の中の人

先づ私共が犬や猫として生れず、人間として生れて來たといふことは、神の聖旨であるとしても、佛説に所謂因縁によるとしても、誠に有難い仕合せであります。しかし多くの人は、折角享けがたき人身を享けて居りながら、聴きがたき妙法を聴かぬために、すこしも人間の尊貴、人生の趣味がわからず、やれ憂世だの、苦の道だの夢だの、娑婆だのと申して、些し思ふやうにならぬ事に遭遇しますと

4. 5. 25

音 福 の 難 患

寧ろそのこと死んだ方がましだと思ひ、空飛ぶ鳥の自由を羨み、野に住む獸の氣樂な生活を冀ふのでありますが、私はそういふ人達に對して、實に同情に堪へないのであります。いかにも人生は涙の谷、死蔭の地であるといふのは、あながち文學者の、虚しい形容の詞ではなく、まつたく事實それに違ひないので、少しく人生の眞髓に觸れた者は、誰でも、榮華の花は忽ちに散り、歡樂の月直ちに曇る、世の果敢なさ、人のつらさを感せぬものはありません。しかし蕃山がいじくも歌ひましたやうに、風の散らすは花のため、雲の隠すは月のためであることを、眞に悟つて居る人は、誠に妙いやうであります。彼の釋尊が、一國の皇太子と生れながら、妻子珍寶又王位

(二)

人 の 中 人

臨命終時不隨者と感づかれては、ながく虚榮虚樂の夢路を辿る氣になれず、可愛い妻を棄て、なつかしい父をはなれて、雪山に駆け込まれましたのは、寧ろ當然の事で、鋭敏な情感をもつて居る者は、誰でも、一度はこの種の厭世感に襲はれるのであります。若し人世を歡樂無憂の郷と見て、望月の缺けたることもなき我身ぞと思ふ人がありとしますならば、それは悟道の結果、既に人世を超越して、自由なる心靈の別天地に、逍遙して居る人達でないかぎり、まだ人生といふものに觸れたことのない、所謂「ボンチ」であつて、寧ろ不幸な人だといはなければなりません。基督の教訓のうちに、なんぢら、哀む者は福なり、慰を受くべければなり。

(三)

自序

往昔奴隸たりし一希臘人はかく曰へりき

暴君は我元を刎ね得べし、されど我精神の自由を奪ふ能はざるなり

と、語何ぞ雄偉なる。壯烈なる。

あゝこの信念を、この氣概を、この自由を、この偉力を、この至誠を、臣として有する君、子として有する父はいかに幸ならずや。嘗ては萬丈の光燄として、精神界の天を燭し、忠孝道德の、形式ばかりが徒らに強ひらるゝの今日、強うる者に熱血なく、強ひらるゝ者に熱涙なきの状態を目撃し、余は寧ろ逆境患難に泣ける、名もなき同胞の上に、やがて來らんとする道德革新の爆源たらんづる望を屬せざるを得ざるなり。

患難の福音

高田集藏著

一人中の人

先づ私共が犬や猫として生れず、人間として生れて來たといふことは、神の聖旨であるとしても、佛説に所謂因縁によるとしても、誠に有難い仕合せであります。しかし多くの人は、折角享けがたき人身を享けて居りながら、聴きがたき妙法を聴かぬために、すこしも人間の尊貴、人生の趣味がわからず、やれ愛世だの、苦の道だの夢だの、娑婆だのと申して、些し思ふやうにならぬ事に遭遇しますと

4. 5. 25

音 福 の 難 患

それこそ、女中たるの資格さへない人で、そんな人が、奥様にでもなつたなら、すぐ横着になり、のふうぞうになり、下々の人をも蔑むに相違ありません。人間のわらいののは、自分がわらいといふことを曉らす、ごこまでも、詰らぬものだと心から謙つて、自分の品格を墮さぬかぎりは、どんな無理な附にも、たゞハイ／＼と従うて、露怨みとせず、喜んで人に事へるところに在るので、少しでも、自分はおの人よりは……と考へだした時は、はや心が八分通り腐つてきてゐるのであります。どうか御用愼なされませ。

話が少し脇道に外れかけましたが、兎に角、不幸に遇はぬのは、人の最大不幸であります。

(六)

人 の 中 の 人

卿も不幸を嘆いて居らつしやる一人ですか、さらばお喜びなさい、卿こそ眞の幸福に入るの門に立つてゐるのであります。どうか、これから下に説くところを注意して讀み、よく／＼お考へ下されまして、それで少しも幸福の緒が見出せませんならば、御手数ですが、一寸私のごころまで、御住所と御姓名とを報らせて下さい。訪問なり、或は通信なり致しまして、神様が天下に一人も不幸な人をお造りにならぬ事（人の不幸は悉く一心の迷から出て居る自業自得）を、御得心のいくやうにお話し致したう存じます。不幸は貧乏や、困難や、家庭の不和、家族の病氣や死亡等ではありません。この一見不幸なるが如く見ゆる出来事の中に、深い／＼神の聖旨の在ることを

(七)

悟り、それによつて、そのまゝの恩を感謝することの出来ぬ、その頑鈍い心こそ、不幸の原因であると思ひます。

世の人が羨む所謂幸福な人は、多くは室咲きの花のやうなものであります。財産や學問や地位や美貌や辯才を有つて居る人の心は、それらのものに圍繞まれて居りますから、赤裸で寒風に曝され、冷水を浴びるやうな寒稽古も出来ず、まのぬく／＼と眠りこんで居ります。そして退屈さましに、文學を讀んだり、音楽を弄んだり、贅澤に宗教を信じ、物好に慈善に斡施して見、人からの尊敬や名譽も、随分それに伴ふではありませんが、人生に吹き荒んで居る無常迅速の嵐が、何時それらの墻壁を破つて、軟らかに脆い心の花を散らし

て仕舞ふやうなことがないとも限りません。それに引きかへ、彼の困難の風雪に遇つて屈せず、寒梅一枝の花と笑みつゝ、悲壯凜烈と、男らしい生涯を送つてゐる逆境の戦士はいかに福でせう。

幾歴辛穠志始堅 丈夫玉碎耻輒全
我家々法人知否 不爲子孫買美田

近頃宗教が流行するのは誠に結構ではあります。しかし真正に宗教の有難いところは、美服共進會や、蓄音器的説教會や、迷ひ子探し然たるお祭騒ぎや、さては物好三分自慢七分の慈善事業の中に在るのではなく、人生の無常に泣いて永遠の天を慕ふところ、自己の罪を悔い、悲んで神に詫ぶるところ、涙と共に氷のやうな冷飯をか

患難の福音

むところ、鬼のやうな舅姑に責められても、涙一滴零さぬところ、
弱い身体で精一杯働いても、誰一人賞めて呉れる者もなく、又何の
報酬も伴はぬところ、泣きつゝ献ぐる祈禱の反響として、あらゆる
垢罵誹謗屈辱迫害を受けて、それをジツと忍ぶところ、そういふと
ころにこそ天國の生命は潜んで居て、春雷將に綻びなるとするの妙
機を藏して居るのであります。

二神の妙法

さくら木を碎きて見れば花はなし

花をば春の風やもてきし

神の妙法

なんと面白い歌ではありませんか。年々歳々春になると花が咲く、
何の不思議もないやうですが、さてその花は何處から来たのか、木
を割つて見ても、ねつから花らしいものはありません。して見れば
、春の風がもつて来たのであらうかと問うたのです。目に見えぬ氣
候の作用、日光空氣の作用、天地化生の作用、なんと奇妙ではあり
ませんか。植物學の研究などやつても、わからぬは花の來しかた、
花の行方であります。(人間の心から咲き出る品性の花も、またそ
のやうに不思議なものです)

音もなく香もなくつねに天地は

書かざる經をくりかへしつ、

思 難 の 福 音

不思議なのは花ばかりではありません。天上の星も不思議、月も不思議、太陽も不思議、地上に山聳に水流るゝも不思議、一塊の土も不思議、一粒の米も不思議、その不思議な天地の現象を見て、あれは何だ、これはどうだと観察思考する、私共人間の存在は、なほなほ不思議、不思議中の大不思議ではありませんか。

勿論人間は天地万物を観察しまして、だん／＼物の性質を究め、又物と物との間に整然たる秩序あり、一定の法則のあることを発見しました。しかし太陽の光線を分析して水素や鐵や滿俺やニツケル等を含んで居るといふことがわかつて、永劫燃々に燃わつて居る、直徑三十万里の火の塊は、私共の祖先が、火の神として拜んで

(二一)

神 の 妙 法

居りました時と同じく、今も依然不思議なものではありませんか。殊に自然の万象、人生の百事を支配して凡ての法則は、決して相乖り、互に衝突するものでなく、うまく調和され統一されて居り、その間に何か神秘的の關係があるやうに思はれますところから、二法一元、若しくは万法歸一と申すことも、此頃は一般の識者に、餘程認められて来たやうであります。而してこの一元的思想はやがて、この法則の主たる神の存在を證するものでありますから、さま／＼の法則からして、歸納的に神の存在を信することが出来る次第であります。

私はこの方面からして、神を凡神的一神として信するものでありま

(三一)

す、神、その名は奇妙、又不思議とヘブルの預言者は録しましたか
 、その神より出でし萬物は悉く奇跡の靈光を帯び、その神の立せら
 れました法則に、人間智識の到達せぬ深みのあるのは、寧ろ當然で
 あります。ところがこの神を信じ、神の靈を頂戴致しますと、今度
 は神の聖旨を標準とし基礎と致しまして、演繹的に万事万物を解釋
 し、又之を人生のあらゆる問題に適用し、處世の指針と致しまして
 、多く誤たぬといふのも不思議であります。爛々たる純聖至誠の靈
 、能く神明に通じて、天理天則を明にしました古人は、驚いて之を
 妙法と名けました。今日愚鈍なる私共でも、この妙法の一端を曉り
 まして、深遠測ることの出来ない神の智慧を、讚嘆せざるを得ない

(四一)

のであります。

さあかういふ見地に立ちますと、空の鳥野の百合花、一として妙法
 の示現でないものはなく、聖人も盜賊も、悉く妙法中のものとなつ
 てまわりまして、天空海潤と心は廣く、天地人生は、神の意思の一
 大發顯と觀せられ隨緣所遇に應じていよゝます。妙法の深味を味
 ふことが出来るのであります。

(五一)

三 活 動

凡て生きとし生けるものは皆動いて居ります。(天体も微分子も動て居る
 しやは、別のほな)これは小兒でも認めることの出来る大事實でありまし

て、つまり一切動生は、活動てふ法則に支配されて居るといっても
差支はありますまい。而してその結果から判断しますれば、皆それ
く一定の目的を以て活動して居るといふことが出来ます。彼の蟻
や蜜蜂などの、生活状態を見ましても、實に驚くべきものがあるの
は、今更申すまでもありません。

この万生活動の事實からして、萬物の本源たる神は、亦生々活動の
大實在でなければならぬと、歸納的に承知することが出来、また
私共人間も、各自の本性に顯はれてる神の意（天命之謂性）に隨ひ
何でも働かなくてはならぬ（率性之謂道）怠惰は天にそむく恐ろし
い罪惡であると合點することが出来るのであります。

そういふ風に、天命人道を承知し合點することの出来るのが、人間
の、他の動生と異り貴いところであると私は思ふのであります。動
生はたゞ本能的に働き、若しくは苦樂の感に隨つて、盲動して居る
のみで、少しもその理由目的を解しません。ところが人間のみは、
天地の妙法を知り、また之を立した神を知りまして、丁度子が親の
意を辨へて奉仕するやうに、自律的に働きます。こゝに至つて始め
て其活動に、道徳的價值を生じ來るのであります。是れ人間には、
靈智といひ、理性と稱する、靈妙心を賦與されてるからで、それに
よつて能く己に克ち、慾を制し、自然を服し、俗力に打勝つことが
出来るのであります。男らしい奮闘も、榮ある勝利もみなそこから

出てくるのであります。

我父(神)は今に至るまで働きたまふ、我も亦働くなり

てふ基督の語は、高尚なる人間の活動を喝破した千古の金言であります。「我は神と偕に働く」なんと高い、美はしい自覚ではありませんか。これは

第一、無限の働であります。個人と個人との私闘は、多く私慾から起るもので、別に賞讃するほどの価値はありませんが、國家の爲めに戦ふとなれば、一兵卒の働きでも、その國家大の重みがついてまゐります。人生に於ける私共の活動は、誠に有限微細なもので、蟬に喩へらるゝ五十年、いかに働きましたも、これほどの事が出来

ませう。しかし私共を、ある必要によつて、この世に送つて下さいました神は、永遠の實在でありまして、私共の小さい働きをも、その無限の活動の中に攝して下さる。そこで私共の人知れぬ短い生涯でも、永遠に影響するものであることを思ひますならば、悪は小なりとも爲すことなく、善は小なりとも爲さるべき様に心懸けるに至るは自然であります。

たとひ短い一生で、理想を實現することが出来ませんが、理想を賜ひし神の、永遠に亘る實在を疑はず、いつか必ず實現さるべきを信じて喜ぶことが出来ます。彼のアブラハムが神の友、信仰の父と稱はれて尊ばれるのはこの點でありまして、かゝる希望と喜とは、

患難の福音

またやがて私共の霊を、天にまで躍り昇らしむる黄金の翼であると思ひます。

又私共が神の善き聖旨によりまして、病氣に罹るとか、或は境遇の爲めに、思ふやうな働が出来ませんが、神は猶他に多くの僕を起して、善き働きをなさしめ給ふを見ますならば、又それに同情致しまして、あたかも自分で其働を爲すが如くに、喜ぶことが出来るばかりでなく、無爲も亦一種の事業であること、何人にも出来る、祈禱仲保の働こそ、人間の爲し得る至高最大の職務なることも、だんくごわかつてまゐります。

有限なる私共人間をして、神の無限なる活動に入らしむるものは、

活 動

全くこの妙法の功德であります。

第二、自由の働であります。人間は動生の如く本能によらず、理性によつて働くのですから、その働は自由であります。少し語弊があるかも知れませんが、私共の多くは、何も奴隷の如くは是非とも働かなくてはならぬことはないであります。世の中には随分働かずに済ましこんで居る者も少ないのでありますが、神を知り自己の裏に偉大なる能力を認め、又活動の領域を発見いたしますときに、もう働かすには居られないのであります。人から強ひられ、或は宗教や道徳の、外部的權威の下に奴隷的に、仕方なしに従ふのでなく、松蔭が

かくすればかくなるものご知りながら
やむにやまれぬやまと魂

と歌ひましたやうに、至誠の煥發するところ、どんな困難があり、
障碍がありましたも、働かすには居られないのであります。是れ即
ち眞の自由であります。

第三、愛の働きであります。何が私共をして無限に、且自由に活動
せしめるかと申せば、その原動力は愛です。神の愛です。神は無
限の愛に在し、その愛の顯現たる天地人生は、亦、いよく高い愛の
實現される機關であります。而して神はその靈を以て人間の裏に臨
み、人間によりて働き出でたまひ、人間に由らずしては、神と雖も

地上に何事をも爲し能はざるほどに見るのであります。併し人間
が生れながら有つて居るものは私慾でありまして（本然の善性は私
慾に蔽はれて容易にその光を顯はしません）神の愛ではありませ
ん。この慾と愛とは人間活動の二大動力でありまして、恰も闇と光の
如く、互に消長し、又互に其本性を相顯はすものであります。慾に
よつて働く人は、到底有限なる地上のものを目的とするのであつて
、たとひ全世界を得ましても、眞の満足はなく、終に走屍行肉たる
に過ぎません。私慾に死し全く愛によつて働くやうになりました、
始めて神と偕に永遠に働くことが出来るのであります。ですから慾
の爲めに働く者には無限の損失があるに引換へ、愛によつて働く者

には無限の所得あり、終に永遠の生命に達するのであります。愆の人が如何にして愛の人となりますか。是れ神の撰擇と、その働きに属することでありまして、人力では到底どうすることも出来ないうやうであります。ごんなことを聞いたからとか、知つたから、或は感じたからとかでなく、人性は變質するものではありません。しかし神はさまざまの攝理により、殊に患難により、或は人格の感化によりて、人間の靈に、この驚くべき變化を與へたまひます。要するに神の聖靈の働きに待つの外はありません。

(四二)

四 奮 闘

あゝ愛よ無限の愛よ永遠の愛よ

汝は天に在りていかに榮光の美なるかな

さはれ汝の謙りて人間に寓るとき

無智と小愛とは荆冠を以て更に汝の頭を飾る

「獨立」第三號標語

何故に夜の闇があるかを知りません。しかし絢爛たる星の光は、天使の眼眸のごと美はしく輝き、地に屬き易き私共をして、座ろに天上永遠の美を偲ばしむるものがあるではありませんか。

何故に歳寒うして、木枯の吹きすさむかを知りません。しかし常盤樹の緑は、世と共に移ぬ聖者の心を示し、物皆死せるが如き凋落の

(五二)

時代にも、猶潜める生命の、いつか萌發し來る春あるを想はしむるものがあるではありませんか。忠臣は國の亂れた時に出で、孝子は家の貧しい時にあらはれます。釋迦に提婆の難あり、孔子に桓魋の厄あり。ソクラテスは毒杯を仰ぎ、基督は十字架に釘けられました。世の光たるこれらの人物の、みな闇黒なる時代に輝き出でました。

ここは、歴史上必然の現象といはなければなりません。美はしいエデンの園にも、蛇は潜んで居りました。大道廢れて仁義ある、この世は到底天國ではありません。ここに神に敵する者の靈が働いて居ります。不法が満ちて居ります。多くの人の愛情は冷かになり、偽善不義驕慢猜疑嫉妬の暗影は、到るところに、神の愛

の自由なる活動を妨げて居るやうに見えます。私共の僅かな經驗に
よりまして、これほどこちらから善くしていても、悪うくさら
れて仕方がないとか、溫柔しうすればするほど、つけあがつて、無
理なごせがまれるとか、随分苦しい場合があるではありませんか
小さい愛の薪を燃やしても、すぐ憎悪の冷水を浴せかけられま
す。折角正義の石を積み立てても、無情の鐵槌に壊されます。
神の愛を有ち、神の正義に據つて、この世に働くのは決して氣樂な
閑事業ではありません。苦戦です、奮闘を要します。
凡て神を敬ひて世を渡らんとする者は窘を受くべし。
神と偕に働く者は必ず窘迫を受けます。古來人生はしばし戦場に

喩へられました。が、神を信ずる私共も亦戰場に立つ兵卒の覺悟がな
くはなりません。こゝでは勝つて生命を得なければ、敗けて滅び
るの外はないのであります。

眠れる精神は死せるにて

「人生は空しき夢なり」と

人生は實なり、まじめなり

「塵の身なれば塵に歸す」

我等の目的はた途は

各々勤め働きて

學藝は長く歲月は短し

形は生けるにあらざれば

悲しき歌もていふ勿れ

行つく所は墓ならず

そは精神をいふならず。

喜び悲みと定まれるに非ず

明日は今日より進むにあり。

よし強くとも我等の心臓は

葬儀のつゝめる太鼓の如く

世界の廣き戰場に出で、

黙々追はるゝ牛馬となる勿れ

樂しとて未來を信する勿れ

働け、只生ける現在に働け

偉人の傳記は皆訓ふ

さて死ぬ折には時なる砂に

其足蹟や人生の

破船失望せる人が

されば我等は奮起して

墓場をさし進行の曲を打つ。

人生の陣所にありて

進んで戦ふ勇者となれ。

逝けるは逝ける過去に任さん

中に清き心もて、上に神を戴きて

我等の生涯も高くなし

足蹟を留めて行き得ることを。

大海原に乗り出して

見て氣を取直すことあらん。

如何なる運にも屈せぬ心もて

絶えず爲し遂げ、絶えず努めて働きて且つ待つことを學ばん

ロングフェローの人生詩 山縣氏譯

何の戦ひなく、またこれといふ目的もななくして、うか〜と日を送る、所謂幸福な人は不幸なるはなく、戦争の目的とその價値を意識して、全身全力を竭して戦ふ人は、光榮あり、また真正の意味で幸福なるはないと思ひます。多くの人は少しでも戦ひのないやうにと、ひたすら安逸姑息平板な境遇を求めて、可惜心意の活動を避けるのですが、心意の健全な人にとりましては、戦ひが激しければ激しいだけ、勇氣も倍し、力も加はり、いよく勝利の確信を以て進むことが出来るのであります。

うきことのなほもこの上につもれかし

かぎりある身の力ためさん

これは前のロ氏の詩と共に、人生の進軍譜ともいふべき歌であります。これほどの勇氣と確信とは何處から出てまゐりますか。是れ直に、人間に、神と偕に働く英剛不滅の心霊のあることを證するものではありませんか。私は靖國神社に參詣する毎に、一種森嚴なる敬拜の念の起るのを禁ずることが出来ません。それは眞正愛國者の英靈は、決して死ぬるものでないことを確信して疑はないからであります。彼の勤王の大義の爲めに天下を敵として戦うた楠正成は、七生人間を叫んだではありませんか。時利あらずして冷き屍を湊川の

叢原に横へましても、それは單に肉体の上でありまして、彼の英魂は永へに皇基を護り、今猶生きて物言へるではありませんか。あゝ、戦ひいかに激くとも屈せざる健全なる心意、よし肉体は斃れましても、千秋萬古、決して朽ちざるの靈魂こそは、實に我らが永遠唯一の所有であります。私はこゝに於て人間の最も光榮ある、價値ある、心靈自由の領土の存することを認めざるを得ません。この自由こそ、神が人に賜へる最大の特權でありまして、人は之を有して、千歳に朽ちざるものであります。これ有つて何物を失ひましても、凡てを有て居るのであります。これ無くして、全世界を有するも、實は何物をも有つて居らないのであります。

(二 三)

五 心 靈 の 自 由

由 自 の 靈 心

宗教を説き、活動を唱へ、至誠を叫び、自由を論ずる者が、往々にしてまだ心靈の大自由を得て居らぬのは、寧ろ滑稽ではありませんか。

奮闘々々と矢鱈に外部のものに戦はうとするのは、まだ血氣のはやりと申すものであります。青年の元氣とか活動とかいふものが、多く火花を散らしたやうな、一時的のものに過ぎないのは、まだ實力が内部に充實して居らぬのに、輕率事に従ふからではありませんか。

患難の福音

多くの人の失敗は、一躍して善人となり、直に聖賢の行を擬せんとするところに在るのであります。一旦の決心奮勵で、眞似事位は出来ませうが、腹から出すといふところには、なかく容易にゆかぬものであります。

世間流行的に修養々々と稱するもの、多くは襲踏摸擬書虎類狗の悪修行、偽善虚徳に陥らざれば幸であります。彼の頭腦に高遠なる宗教道徳の問題を考へ、口に喋々辯ずるも、些々たる家庭問題や、パソ問題の爲めに心を悩まし、不景氣を嘆じ、運命の拙きをかこつやうでは、救も悟も覺束ないではありませんまいか。

今、正當なる修養の道に就いた者の心靈は自由であつて、能く外部

(四三)

心の自由

の境遇に超越し得るものであることを、極めてわかり易い二三の例によつて説明いたしませう。

彼の露國現皇帝が、まだ皇太子であつた時、世に皇太子と生れたことが、何よりの不幸であるやうに仰せられたといふことですが、いかに不幸と思へば、如何なる境遇でも不幸、幸福と思へば、如何なる境遇も幸福であります。私が軍隊に居りました時、よく軍隊は名譽の監獄だなど、吐く者もあり、はげしい勤務や、虐待苛責に堪へ得ずして、自殺する者さへありましたが、やはりそれを不幸と思ふから不幸なので、私のやうな、心が鈍うて、格別不幸と思へぬ者にとりましては、少しも不幸ではなかつたのであります。皇太子と

(五三)

生れても不幸な人があり、一兵卒であつても、随分幸福に暮らすことが出来るところを以て見ますれば、人の不幸は決して外部的のもの、物質上のものによつて決まるのでなく、全くその心意の健全なること、然らざるとに因るのであることは、誰にでもよく分ることだらうと思ふのであります。

今左の手を冷水に、右の手を熱湯に入れまして、急に両手を微温湯に入れて御覧なさい。同じ微温湯が、冷たきつて左の手には熱湯のやうに感ぜられ、熱くなつて右の手には、非常に冷たく感ぜられませう。それは微温湯そのもの、温度よりも、こつちの手一つで、さういふ相違を生ずるのではありませんか。して見れば、同じや

うな境遇に居りましても、苦しい、つらい、悲しいと思ふ者もあり、なにこれほどのこと、平氣で忍ぶことの出来るものもあります。ですからいろいろと境遇を變へて見るよりも、心靈の脩養を志し、其心意を強くしてゆく方が、はるかに賢い道であると思ひます。否心意を強くしやうと思へば、出来るだけ困難の境遇に處して、避けずひるまず恐れず、終りまで忍耐し、死ぬるまで奮闘するにまさる道はないのであります。

六 新生の機

患難の福音

尤も凡てのものは神より出で、而して神より出るものゝみが善いのでありますから、艱難も自ら物好きに求めた艱難では、格別役に立ちません。たゞ私共の願に反して起る艱難、即ち父の與へたまふ苦杯のみに、貴い試煉の價値が存するのであります。

昔しから、堪忍も、なる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍と申しますが、そのならぬ堪忍をするとき、そこに始めて自分以上の力が現はれるので、やがてそこに心靈の自由を得て居るのであります。非常なる危急大なる艱難に處しては、往々自分ながら不思議と思はれるほどの力が出ることは決して珍らしいことではありません。

(八三)

新生の機

昔し獨逸のある片田舎で、一人の青年が、誤つて泥沼の中に陥りましたが、身をもがけばもがくほど、いよゝ沈み込むばかりで、見て居る朋友も、いかにしてか救うてやらうと、さまざま智恵を絞り、百方術を竭しましたが、みすゝ見殺しにするより外に、ほんご救ひの見込はありませんでした。

ところが、そこに通りかゝつた今一人の青年は、矢庭に拳銃に装填し、銃口を瀕死の青年に向けまして、たゞ一發の下に殺して仕舞はうと致しましたので、今まで死を待つの外、すべのなかつた青年は、烈火の如くに怒り、汝薄情漢よ、惡漢よ、人非人よ、汝は我をこの窮地より救はんとせず、却つて殺さんとは、おのれ汝ら如き者に

(九三)

患難の福音

むざむざと殺さるべきかと思ひつゝ、死力を出して、身を進めましたので、不思議にも、やつと岸に達することが出来ました。拳銃の青年は笑つて拳銃ををさめ、助からぬ友の命が、意外にも、假構の敵對によつて助かつたことを喜んだと申すことです。これは後に鐵血宰相と世界に歌はれました、ビスマークの青年時代の出来事と聞きました。

なんと有難い拳銃ではありませんか。艱難の時に於ける助は何處から來ますか、助は仇と見ゆる拳銃から來るのであります。天は自ら助くる者を助くと申す通り、卑怯未練遲疑不信なる自己が死にますとき、始めて顯はれて來る眞我の力は、實に天來のものであります

新生の機

彼の獅子は其兒が三歳になれば、千尋の谷底に蹴落して、その力を試めすといふではありませんか。さすが百獸の王といはるゝには、この死地を経ねばならぬのであります。又鷲がその巢雛を育てますには、やはり高い懸崖から落ちて、その將に巖角に碎けやうとする刹那、急に下つてその翼に負ふと申します。それほどきはごい目に遇うてこそ、あの高い天空に沖り、幾千里の長程を凌ぐ強い翼となるのでありませう。神が私共の靈魂を活かし、強めたまふも、それと同じことでもあります。私共が艱難辛苦迫害凌辱に遇うて、自分ではどうしやうかと思ふ時こそ、最も深い神の愛の存するところで、正に信仰の足の立つ時、靈の翼の生へる時、永遠の腕にドツサリ

と心の腰を下す時であります。

七 キ リ ス ト

卿がもし聖書をお読みになりますなら、信仰に進む大なる助となる
でありませう。聖書は艱難者の實驗録であります。神を敬ひし古人
の、靈的奮闘と勝利の記録であります。多くの人が聖書を読んでも
分らぬのは、贅澤半分に讀むからです。聖書の神髓はキリストの如
く苦み、キリストの如く侮られ、辱められ、キリストの如く忍び、
キリストの如く勝つ者でなければわかりませぬ。これは慘憺たる、
人生の活實驗を以て讀むべき書でありまして、實に人生の最良教科

(二四)

書である、私は信するのであります。

而して申すまでもなく、聖書の中樞はイエスキリストであります。
上下四千載に亘る歴史人物事件は、悉く、受難者の王キリストを顯
はす爲めの背景となつて居るのであります。人中唯一の完全者は希
伯來書の記者が録しましたやうに、苦難によりて完全うされたので
あります。而して人類はすべからず彼に由り、彼に在りて彼にまで
進歩すべきものであります。

(三四)

聖書の中樞なるキリストは、亦人生の中心でありますから、人生に
在る凡てのことは、キリストを俟ちて、始めて解釋することが出來
るのであります。而してキリストの如くなるといふのが、妙法の極

意、人間の眞目的である何よりの證據には、私共キリストの如くならうと志す者にござりましては、天下地上の一切萬事、一として適からざるはなく、ことごとく働いて益となるのであります。

我キリストに倣ふが如く、汝らも我に倣ふべしと言ふことが出来ました聖パウロは

そは我、いかなる狀に居るも、それを以て足れりとすることを學べばなり。われ貧賤に居るの道を知り、また富厚に居るの道を知り、飽くことも、飢ることも、豊厚ことも、歉乏ことも、諸の事に於て我之を熟練せり。

と告白して居りますが、人生のあらゆる經驗は、いよいよ私共をキ

リストの完全に導くの機會となるのであります。ですから眞正クリスチアンに境遇の不平とか、怨恨とか、失望とかいふものがあらう筈はないのであります。さらば私共は次の如く歌ひつゝ、神の導きのまに／＼勇ましく進まうではありませんか。

あゝ神よ悲惨の道は我爾に到るの徑路なりき
而して今も尙暗黒の裡に在つて

我は目を閉ぢて惟爾に従ふ

幽陰日光單へに爾の聖旨に任かす

悲喜哀樂惟爾の命に従はん

爾の大圖に則つて

我生涯は聖ならざるを得ず

祈禱の目的は、我意を棄て、神意に従ふ力を得るに在ると思ひます

汝らは禱るべきところを知らざれども聖靈言ひがたきの歎きを

以て聖徒の爲めに祈りぬ

この聖靈の祈りに一致して祈ることを得るために、私共は我儘勝手な願を棄てねばなりません。

我願をなさんとにあらず聖旨を成らせたまへ

てふキリストゲツセマ子園中の祈は實に祈禱の極意でありまして、

この孝子の如き従順、絶対的服従こそ、最も天父を喜ばせ奉ること

であると同時に、世の凡てのものより獨立し、超越し、境遇人爲によつて動かされず能く乾坤に濶歩し得るの秘訣であります。

八勝 利

榮あるキリストの生涯を結論するものは十字架でありましたが、その十字架の上から

我勝てり

と獅子吼されましたキリストの心臓は、あらゆる世の力、暗黒の權威の襲撃を受けても、慘憺たる奮闘の結果かすり傷一つをも負はず、却て敵の爲めに、天父の憐みを祈りたまふほど、愛の實力に充た

されて居たのであります。

かく終りまで、如何なる人をも愛して渝らぬのは、なんと心靈の大

自由、大勝利、大策光ではありませんか。

はれてよし曇りてもよし、不二の山

もとの姿はかはらざりけり

地上人間のあらゆる事變に處して、毫も變らなかつた、その天より

も高いキリストの心靈こそ、彼が天下萬世萬民の教主として仰がる

所以ではありませんか。此の如き聖者の流し、血に、世を贖ふ

力はありますまいか

終に私共キリストに倣ふ者は、どういふ點に奮闘せねばならぬか、

又どういふ風に勝利を得べきかについて、少しく實驗的の方面から考へて見たいと思ひます。

奮闘は先づ心靈の獨立を保つことから始まらねばなりません。

私共の心靈は生來私慾に蔽はれて居りますから、盲目にして自他の

別を辨へません。丁度小兒が、人の有つて居る物は何でも欲しがる

と同じやうに、外物を求めて、しばらくも休まざるものがあるので

あります。女を見て劣情を起し、美食に垂涎し、富者を羨み、智識

を貪り名譽を望む等、それに多少高卑の別はあるといたしまして

、何れも無智より出る心の醜狀を露はすものでありまして、人間の

煩悶墮落争闘、一切の悲惨事及滅亡は、悉く之に因するのでありま

す。

ですから道に志す者は、先づこの點に深く注意し、如何な誘惑に遇ひましても、決して外物によつて引き倒されないやうに、堅く自ら守り、神聖なる心靈の獨立を保たねばなりません。

さりさてこの世を避けて山中に靜居し、我獨り清しとすましこむのは、奮闘ではなく、時として敗北であるかも知れません。エノクの如く妻を娶り子を生子、俗人と交り、人並の生活をなしつゝ、猶神と歩むことは、神を信する者にとりて、決して不可能なことではありません。彼の白露が、青葉の上にあれば緑の玉となり、紅葉におけばそのまゝに、紅の玉と見えますが、その實、白露はやはり白露

で、すこしも色に染つてゐるのではありません。自ら守つて潔く、外物に執着しない心は、宛ど白露のやうに、いつも玲瓏透徹、何物にも汚されないのではありません。ごうしたならば、そういふ潔い心を修養することが出来ませうか。

それにはよく人生の無常を觀じ、現象の假相を悟つて、我に屬するものと、我に屬せざるものとの別を明にすることが大切であります。その爲めに「死」を考想するのもよろしい、禪の無字を透過するのもよろしい、兎に角頼むべからざる外物に頼まずして、始めて眞に頼むべき我心靈無限の力、我に在るの神に頼ることが出来るのであります。

患難の福音

キリスト山上の垂訓に、天國に入る者の資格九を説かれました、其第一は心の謙虚であります。

心の貧しき者は福なり、天國は即ち其人のものなればなり
死生命あり、富貴天に在りと申します様に、私共は憂慮ひて能く生命を寸陰も延ばすことは出来ません。これらは皆自分以外のもの、五賦與でありまして、富も健康も、生命そのものすら、何時奪はるゝかもわかりません。これは受けて感謝すべく、失うて泣くべからざるものであります。族長ヨブは其大なる富と、子女のすべてを失ひまして、少しも天を怨みず、人を尤めず

エホバ與へエホバ取りたまふ、エホバの聖名は讃むべきかな

勝利

と申しまして、かゝる大損失(?)のうちにも自己を失ひません下した。然るに多くの人は、富みては傲り、貧乏になつては溜ひ、人に知られねば愠り、悪く思はるれば怨みるといふ風に、その心が外物の爲めに、容易に動かされるのであります。

天災の爲めに富を失つたところで、まだ身體があるではありませんか。よし身體が病のために腐つたところでまだ心靈があるではありませんか。この心靈こそは、人間無限の富、自由の領域であります。私共自身、私慾や不信の爲めに、外來の汚染を招かぬかぎり、何人も亦何物も侵すことの出来ない聖所であります。神の愛は聖靈によつてこゝに注がれ、その聖靈の働に随ひ、善を實行してやまざる

患難の福音

るときに、キリストの靈徳は、やゝにこゝに形づくらるゝのであります。

神を私共の父と呼ぶのは、私共の心靈の父といふ意味であります。私共の心靈を潔くし、強くし、完うせんが爲めに、神は人生の萬事を導きたまふからであります。

キリストを私共の主と崇めるのは、私共の心靈の主といふ意味であります。信仰によつてキリストを受け、心奥の至聖所に、王として崇むるときに、我心靈は全くキリストに支配されて、神の聖旨は行はれ、天國はそこに實現するのであります。さればこの信仰の實驗を得ましてからは、奮闘はキリストの力です、勝利もキリストの榮

勝利

です。

かく自己の空無を悟り、神の實靈を受けて、大能の御手に乗托してゆくときに、我は明に、神の靈によつて、永遠に亘る神の活動に與つて居ることを覺り、無限の感謝、無限の歡喜、無限の希望が湧いて來るのであります。

私共は透明の靈體となりまして、たゞキリストの榮光を反射するのみですから、修徳の最後まで襲ひ來る、傲慢といふ勁敵にも見事打勝つことが出来るのであります。もし悪魔が卿に媚び、卿の衆徳諸善に對し賞讃阿諛の辭を呈しますならば、卿は躊躇せずしてお答へなさい

264

940

明治四十四年五月二十五日印刷
明治四十四年五月二十五日發行

大阪市北區西野田茶園町七百六十五番地

著者兼發行者 高田集藏

同 所 高田みちよ

印刷者 高田みちよ

同 所

發行所 獨立社

振替貯金口座大阪三三九八三番

患難の福音

患難の福音 完

と。
我にあらす
キリストなり

恩寵の記念 獨立

月刊

○一部五錢十部五十錢郵税不要

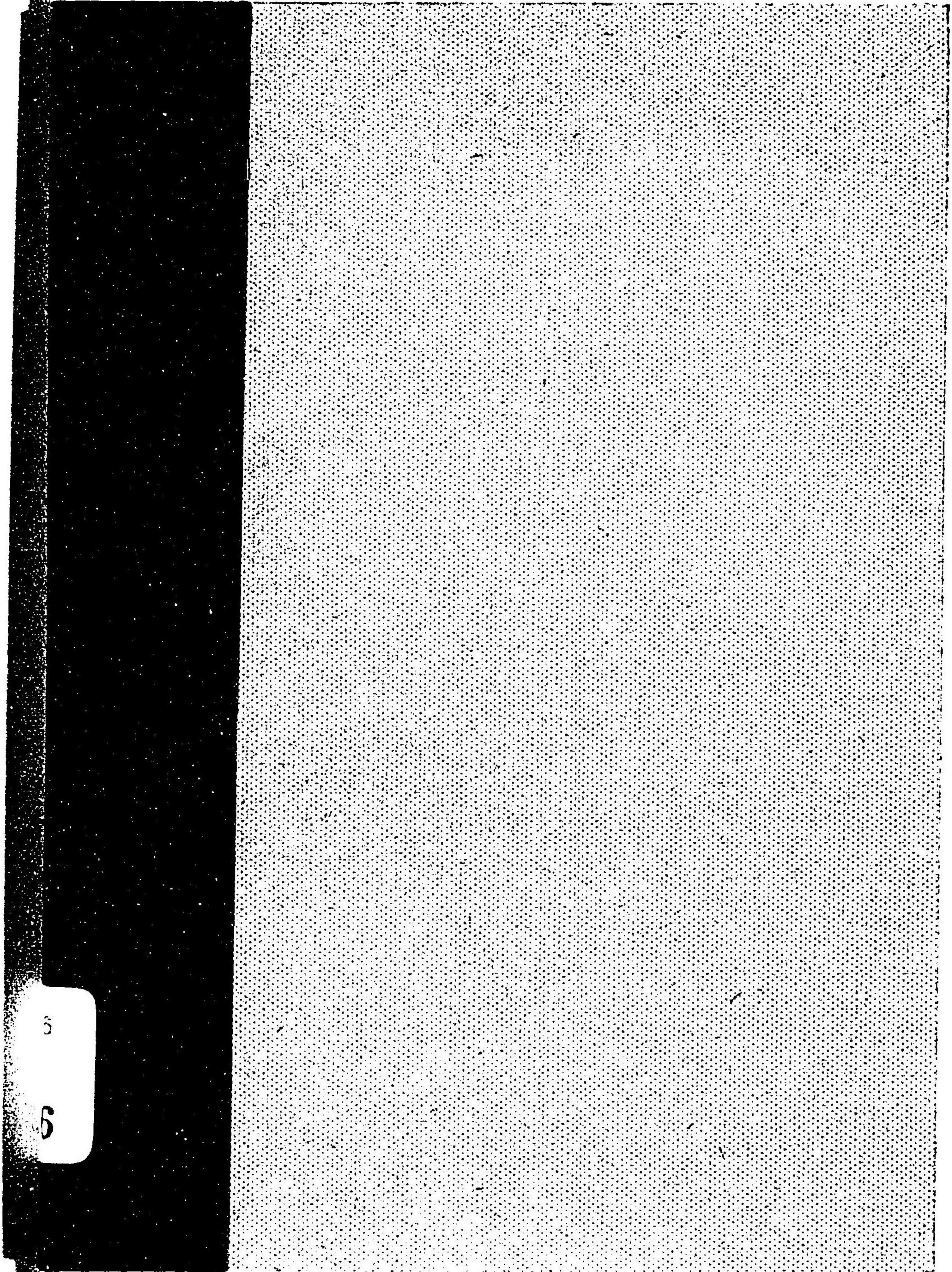
恐らく日本で、この雑誌はごつまらぬ雑誌はありますまい。思想は低し文章は下手、目を喜ばす装飾もなければ大家の名文も載つて居りませんから、千人のうちで九百九十九人までは、大抵唾棄なさるでせうと思ひまして、今廣告するにつけても實に恐縮に存して居ります。それなら廢した方がい、だらうと仰る親切な方があるかも知れませんが、それがやむにやまれぬ何とやらで、其何とやらだけは、辛抱してながい間読んで下さるお方でなければお解りになりますまいかと存じます。……

聖書默想錄

隨時刊行

○一部十錢十部一圓郵税不要

蠶が桑の葉を食ふやうに、聖書を始から終りまで、はつり／＼私の一生涯中に味ふて見たいと思ひ、そのおいしい味を、皆様と一緒に嘗みたいと考へまして、近々こういうものを出します。



5
6

患難の福音

高田集蔵

国立国会図書館

020354-000-0

特16-416

患難の福音

高田 集蔵/著

M44

ABI-0161

